

明治大学教養論集 通巻421号
(2007・3) pp. 97-128

マリア・フィロメナ・モルデル

『ゲーテの形態学的思想』¹ [翻訳・注解]

第三部 {その5}

長 尾 史 郎

目 次 [全体]

序 説 [既訳²]

第一部 『具体的思考』の実行の固有の相貌 (fisionomia; physiognomy) とその諸条件³

第二部 『具体的思考』に内在的な知覚的な諸プロトタイプ [原型] と言語 (ランゲージュ) の諸プロトタイプ — 諸通過の理論と翻訳の理論としての形態学的プロジェクトの確立⁴

¹ Maria Filomena Molder, *O Pensamento Morfológico de Goethe*, Imprensa Nacional-Casa da Moeda, Lisboa, 1995. [502 pp.]

² [訳注] 『明治大学教養論集』通巻 334 号, 2000 年 3 月

³ [訳注] 以下のように既訳 — 「第一部 {その 1}」: 「1. *Crítica da Faculdade de Julgar* [*Kritik der Urteilskraft*; 『判断力批判』] の肥沃な諸当惑」, 「2. 判断力のゲーテ的な変形 — *gegenständiges Denken* [対象的(な)思考(すること)] の構成」 [『明治大学教養論集』通巻 336 号, 2000 年 9 月]; 「第一部 {その 2}」: 「3. 「具体的思考」の諸確信 — 精神の可塑性および自然の意図性」 [『明治大学教養論集』通巻 343 号, 2001 年 1 月]; 「第一部 {その 3}」: 「4. 問題 (o problema) と問題的なもの (o problemático)」 [『明治大学教養論集』通巻 351 号, 2002 年 1 月], 「5. {1}」 [『明治大学教養論集』通巻 351 号, 2002 年 1 月]; 「第一部 {その 4}」: 「5. {2}」 [『明治大学教養論集』通巻 355 号, 2002 年 3 月]; 「第一部 {その 5}」: 「5. {3}」 [『明治大学教養論集』通巻 361 号, 2002 年 9 月]; 「第一部 {その 6}」: 「6.」 [『明治大学教養論集』通巻 370 号, 2003 年 3 月]; 「7.」 [『明治大学教養論集』通巻 373 号, 2003 年 9 月]; 「8.~10.」は『明治大学教養論集』通巻 381 号, 2004 年 1 月。また, 「参考文献」表は, 全巻終了後の最後に一括して示すことにする。

⁴ [訳注] 以下のように既訳 — 「第二部 {その 1}」: 「モットー」 [『明治大学教養論集』通巻 385 号, 2004 年 3 月。「第二部 {その 2}」: 「展開」 1. 「諸植物の変態のプロジェクト — シンボリズムの過程としての一つの理論的言語 (ラン

第三部 〈現われること〉の諸グレードと省察の諸グレード——自然の、および芸術の図式的配置

目次 [本稿]

第三部 〈現われること〉の諸グレードと省察の諸グレード——自然の、および芸術の図式的配置 {その5}

モットー⁵

展開⁶

4. 現れること、掩蔽すること、および視点。象徴化すること——認識的行為の真髄における詩的な一つの手続き。自然の、および人間の可塑的な一つのプロジェクトの迷走点としての象徴。{その2}
5. 理念、概念、象徴。*Urphänomen*。美的経験の極限的性格。象徴とアレゴリー——理念と概念との関係の再訪。理念と象徴的運動の停止。概念と概念化の過程 {その1}

ガージュ)の構成」, 2.「直観と演繹。*Urpflanze* [原植物] および *Typus* [型]:『明治大学教養論集』通巻387号, 2004年9月。「第二部 {その3}」: 3.「配置の大きな企画。比較的な方法。象徴の遭遇に向けて——要約的なヴィジョン」; 4.「変態の理念の本質的な改革。変態のプロジェクトの約束された継続者としての芸術家」; 5.「変態の諸過程 (*Werden* [生成] とエンテレキーの諸概念) と認識行為 (*correlato* [相関物] の概念) を構成するものとしての、〈同/他〉, 〈存在/存在するに至ること〉の諸対」:『明治大学教養論集』通巻391号, 2005年1月。「第二部 {その4}」: 6.「ゲーテの意味での科学としての形態学の提示への事前の諸点と移行の外観」; 7.「形態学的项目——自然の、および芸術の、一つの図式化 (*esquematismo*; *schematism*)」. 判断能力の科学としての形態学」; 8.「形態学は、支配的な科学にとって、一つの内的な、外的な、あるいは辺縁的なプロジェクトか? ゲーテへの一つの帰還の必要」:『明治大学教養論集』通巻394号, 2005年3月。「第二部 {その5}」: 9.「認識的諸設問の模範的例示化としての『諸色彩の理論』。翻訳の一つの形態[形式]としてのシンボル」; 10.「ゲーテにおける理論の概念——一つの微妙な経験的知識。事物における転換の運動の諸限界——一つの積極的な懐疑主義, 一つの条件付けられた信頼」:『明治大学教養論集』通巻399号, 2005年9月。「第二部 {その6}」: 11.「自然の哲学および諸色彩の理論の仲介を通じた認識の理論——顕示の一つの一般理論。私の中に世界を予感を通じてもたらすこと」:『明治大学教養論集』通巻401号, 2006年1月。

⁵ [訳注] 「第三部 {その1}」:「モットー」『明治大学教養論集』通巻401号, 2006年1月 [「第二部 {その6}」と同一号]。

⁶ [訳注] 「展開1.」と「2. {その1}」は「第三部 {その2}」:『明治大学教養論集』通巻406号, 2006年3月。「展開2. {その2}」と「3. {その1}」は「第三部 {その3}」:『明治大学教養論集』通巻412号, 2006年9月。「展開3. {その2}」

* * * * *

[379] 4. {その2}

それらの〈諸言葉—象徴〉の、それらの象徴的諸提示の起源——哲学的諸概念——は、一つの証示の中にあるのではなく、一つの類比的な比較の行為の中にある——一つの直観の対象に関する反省が全く異なった一つ概念に——そしてその概念には多分、どのような直観も対応することが可能でないだろう——移転される。それが指示することは、象徴は常に可視のものの領域のものであり、可視のものとの経験の領域のもの、経験の偶有的な次元[秩序]のものであるということで、そして同時に、まさにその同じ次元を超越する——すなわち、他の一つの次元の啓示者である——ための不断の一つの緊張を持っているということだ。実際、われわれが象徴へ到達するのは、われわれが全体において主意的に統制することはできない一つの間接を通してである。類比的な関係においては、自ら緩む——親近性の諸点の一覧表に還元されない——一つの証拠がある、つまり、その *ratio* [理由、根拠] の分析は常に不十分である——いかにそれが網羅的なものであれ——。精神は諸結合によって魅かれるが、しかし、諸結合には、精神によって構成されて、自分のその統制的な、道具的な、諸操作のモデルの中に統合されるような結合もあるし、また他の諸結合は、精神と、精神が確立する諸親近性との絡み合いを説明する——その際、選別された諸対象の固有の 아우ラ [靈氣] を認知しつつ（と言うのはその選択は、それ自体が一つの結果、その 아우ラ の一つの表出であるからだ）——⁷。カントの提示した——君主制の国家の、およ

と「4. {その1}」は「第三部 {その4}」:『明治大学教養論集』通巻416号、2007年1月。

⁷ [原書注番号283] 아우ラの概念はベンヤミンの思想に固有のもので、彼はそれを色々なテキストで導入するが、特に写真についてとボードレーンについての著作で行う。アウラの経験は、各々の事物とわれわれとの関係に関するもので、それはその事物が「およそ可能な限り近いような一つの遠隔さを独特の様態で顕示する」*

び専制的国家の——諸事例のケースにおいては、その *ratio* は類比を操作する者によって大いに統制されているように見える、と言うのは、第二のケースにおいては、国家の形態であれ、手挽き臼の作動であれ、その起源を人間的な生産に持っており、そして、第一のケースにおいては、関係の同じ型が維持されない場合には、有機体は一つの可視的な現実であることを止めないのである⁸。

常に起源を一つの反省的一比較的な行為の中に持っているのも、*hypo-*

(《Kleine Geschichte der Photographie [写真小史]》, II. I, p. 378) とくだ。もしもアウラが自然の諸対象と同じく歴史的な諸対象にも適用されると、一定の場合どもにおいて、消失する力があるように見える——アウラの一つの喪失が与えられるので(内在性によって、再生可能芸術において生じるように、そして、しかしながらベンヤミンはほかならぬ写真の胸中において一つの再生[復活]を発見するかにみえる)——。ハシシに関するテキストでアウラは一つのより広い、形而上学的な到達範囲を獲得する——それはあらゆる事物において、各々の事物がそこに象嵌されているように見える装飾的な被覆に対応して——(《Protokolle zu Drogenversuchen [麻薬実験のためのプロトコル]》, VI, p. 588)

- * [訳注] 「そもそもアウラとは何か。空間と時間の織りなす不可思議な織物である。すなわち、どれほど近くにてあれ、ある遠さが一回的に現われているものである。夏の真昼、静かに憩いながら、地平に連なる山なみを、あるいは眺めている者の上に影を投げかけている木の枝を、瞬間あるいは時間がそれらの現われ方にかかわってくるまで、目で追うこと——これがこの山々のアウラを、この木の枝のアウラを呼吸することである。」[W・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション 1』久保哲司訳、ちくま学芸文庫、p. 570]

- ⁸ [訳注] 「それゆえ、アプリオリな諸概念の根底に置かれるすべての直観は、図式であるか、それとも象徴である。そのうち図式は、概念の直接的描出を含み、象徴は概念の間接的描出を含む。図式は、このことを証示的に行い、象徴は、このことを類比(類比のために経験的直観も使用される)を介して行う。類比では判断力は二重の仕事を行う。すなわち第一に、概念をある感性的直観の対象に適用し、ついで第二に、この直観に対する反省のたんなる規則を、最初の対象がその象徴にすぎないまったく別の対象に通用する。たとえば君主国は、国内法にしたがって統治されるならば、魂のある身体によって表象される。ところが、君主国は、単独の絶対的意志によって統治されるならば、たんなる機械(たとえば手挽き臼のような)によって表象される。しかし両者の場合とも、ただ象徴的に表象されるにすぎない。というのも、専制国家と手挽き臼との間には類似性はないが、しかし、この両者とこれらの原因性をとを反省する規則の間には類似性があるからである。[判断力の] この仕事は、いっそう深く探究する価値があるにもかかわらず、これまでまだほとんど分析されていない。しかしながら、ここはこの問題に立ち留まるべき場所ではない。」[牧野英二訳「判断力批判 上」『カント全集 8』pp. 259-260]

typose [直感的表出] はその最も眼晦まし的な、かつ最も教示的な様相を示すのは、象徴化されたものが一つの可視的な現実 — その由来がわれわれの眼を逃れ、それをわれわれはそれを決して押し留めることなしに喚起しあるいは予測する — である時か、人間に内在的な一つの不可視のもの — 思想 [思考] がその例だが — の時でさえある。いったいどのように思考の活動を記述するのだろうか — もしもわれわれの存在の、そして他のものたちの存在の具体的な諸条件との遭遇によってでないとするれば、 — その経験はわれわれの、および他のものたちの、身体を通じて調整されており — その非物質的な本性の信仰を与えつつ —、時間において、そして空間において決定されていないとするれば —。その生の具体的な諸経験との非照応性 — それは、ハンナ・アーレントがハイデggerを敷衍しつつ言ったように (*op. cit.*, p. 85), 思考を「秩序の外」のものに変えるのだが — の発見を通じるこの接近方法以外に、われわれは一つの積極的な提示を試みることができる。すなわち、思考の固有の経験は生きることの具体的な経験には等価物を見出さないということで、始めも終わりも持たず、空間を占拠しないものである思考は、まさに、存在することの総ての具体的な諸決定の留保を通じて生まれるものだが、しかし、その非物質的な経験の具体的な実現の一つの形態 [形式] が試行されない限りは、決して、主題化されることは可能にはならないだろう。そこでありとあらゆる諸顕示があらわれ、そこでわれわれは時間的および空間的な一つの極限の接近を蒙ることになる — 呼吸の律動性から呼吸停止まで、風の音高い急激さから閃光 [稲妻] の明るい連鎖まで、夜の静寂と暗さから朝の光の目覚めまで — 「*nous* [ヌース] の行為が生だ」 (*Metafisica* [『形而上学』] A 7, 1072 b25)。[3 8 0]

従って、*hypotypose* [直感的表出] が、完全に異なった本性のものであるのは、象徴化するもの [o symbolizante; the symbolizing] と象徴化されるもの [o simbolizado; the symbolized] との間に、常に現実化する連続的な一つの進歩がある場合だ — 例えば、*Grund* [根拠] の概念と *Grund* の

言葉〔単語〕との間に生じるようなものだ。ここから、*hypotypose* [直感的表出] — 象徴的提示 — は、その最も謎めいたかつ肥沃な顔貌を示し、それ自体が不断に提起される課題であり、問題になっているのは — われわれはまた新たに想起するのだが —、定義を通じて提起される問題だ。すなわち、哲学においてそれを実現することの不可能性と、その諸理由だ — 一つ概念は一つの言葉に提示されるが、その言葉は常に、分割された、相続された、あるいは分割へと召還された一つの言葉である — その中には、要約されて（無限定に分析可能だ）数多の認識が集められている。特に、言葉〔単語〕は諸イメージ〔形象〕を集め、推進し、展開し、発見する。ゲーテにとっては逆もまた真で、形象と言葉は相関物であり、表出 [proferimento; utterance, expression] と形態付与 [configuração; configuration] は、互いに他を求め、要請し合う諸手続きである — 聴覚に対して言われたこと、ないし歌われたことは、同じ様態で視覚に対しても照応しなければならない、とゲーテが箴言 907 で言う通りだ。それをここにすぐ続けて再現するが、それは、直接に、象徴的・神秘的な諸虚構を創り出すような諸曖昧さについて警告を発するもので、例えば、一つの言葉〔単語〕が権威的に発声される（何を言おうと欲するかを証示することの困難さを確認するだろう形象を提示するのでなく）ときがそうだ — 「(……) もしわれわれが諸言葉〔単語〕で、われわれが形象に転換するのに成功しないものを発音して示したら、そしてもしわれわれが言葉〔単語〕で発音するのに成功しないものを形象で似せるとしたら、それは、完全に受容可能な手続きである⁹。」これは形象と言葉〔単語〕の間の戯れ〔プレー〕で、それは表出の諸困惑を説明するもので、

⁹ [訳注] 「言葉と形象とは、さまざまな形象的表現や^{ひび}喩などにくらでも見られるように、絶えず求め合う相関的な存在である。……形象となりえぬものを口で語り、口では語りえぬものを形象で示すのは、それなりに当然のことであった。しかししばしば不当な行き過ぎが行われ、本来形象によるべきことがらが口で語られることがあって、そこから二重に不都合な象徴的・神秘的な妖怪が生れたのである。」〔岩崎英二郎・関楠生訳「箴言と省察」『ゲーテ全集 13』p. 341〕

一方から他方への、「形象と言葉〔単語〕との再統合から出発して形成された生きた概念」¹⁰に到達しようとする様態でその和解を求める移行それ自体において示されるのだ。

〔381〕各々の概念を象徴的な形態〔形式〕として認識することを学ぶことは、本来の概念の形成に、およびその持続の可能性に、内在的な運動を認識することを試みることだ。この運動は、その概念を指示し、それを提示し、そしてそれを問い質す言葉〔単語〕の、発見的な——無限定に自己実現しつつ——価値を通じて行われる。*Grund*〔根拠〕の言葉〔単語〕の諸喚起は総て、*Grund*の概念確立へ向けて共に走る——一つの活動の動機、一つの事物の支持、基床、保安、安定性、維持、釣り合い、理性〔理由〕。このようであるから、各々の概念（象徴的形式としての）は、一つの綴られた、コミュニケートされた、諸言葉〔単語〕に化肉された、経験の再興、認識（還元的形式の下での）の一つの意図、その諸変態の歴史（世界を了解し、提示することを視野に入れつつ）である。われわれは、カントにおける、純粹概念の図式が確立されることの様態の解明を、一つの哲学的な言語の構成される様態へのもう一つの接近——むしろ、概念化の過程のまさに決定への、それを実現するその瞬間における、一つの接近——と見ることができるだろう——量の図式としての時間の**継起**、質の図式としての時間の**内容**、関係の図式としての時間の**秩序〔順序〕**、そして様相の図式としての時間の**結合体**が、その過程の内的な根底として、諸類比の一つの系列を視界にもたらし、そして、図式の生産の過程に関する結論は——*Gemüth*〔心情〕がいかに（想像の修辭的綾において）振舞うかの様態を解明すべく試みるとき——、時間が象徴化されたものであるということだ。多分、範疇は、それ自体が、

¹⁰ [原書注番号 284] 死後、《Ästhetische Pflanzen Ansicht》、の表題で発表された幾つかの散在する評注の部分をなすゲーテの言葉（*Aus dem Nachlass, Metamorphose* 1831, LA I, 10, p. 249*）。

* [訳注] Und zuletzt aus Bild und Wort zusammentretenden lebendigen Begriffs. [そして最後に視覚像と言葉〔単語〕から共同して歩みくる生きた概念の]〔

あの象徴的な関係——図式を通じて（自ら加工しつつ）、実現される、あるいは配置される——から出発して生まれる。諸範疇は時間——それらの中に継続的に機能として自らを提示する——の決定の、固定化の、諸プロジェクトなので、次のように想定できる。すなわち、図式的な手順は、概念を提示しつつ、自分の固有の生成的な条件を発見することであろう、と。

哲学的な諸概念が自らそうであることを発見する象徴的な諸形式の構成が想定させるのは、反省的な活動は、概念化の運動の基盤上にある——あたかも反省が原初的なものであり、言うことの可能性の母体であるかのように——ということである。まさに初めてのことであるのは、カントのテキストにおいて言語（ランゲージュ）が *energeia* [エネルゲイア] として提示されていることである——フンボルトの様式で、直観と概念との間の、形象と理念との間の緊張的な不可分性を確証しつつ（相互の間の傾きを白日の下に晒して）——。そして、しかしながら、象徴と象徴化されるものとの間には、混乱の無い密着性——環の分割された2つの部分が互いに再合一する（それらが意味するところの合意を通じてそれを再興しつつ）場合のような——が存在することはできない。象徴と象徴化されたものとの間には、最も高揚した（可視および不可視の）諸象徴の場合には、それらが統合されている異なった諸秩序[次元]の固有の異質性がある。それは、象徴的な関係は反転することが不可能だ（美的なものは美[美しいもの]の象徴ではない）ということを含意する異質性でもあるが、それは、他方では、極限的な様態で、*energeia* としての言語（ランゲージュ）がその能力を持つところの変換が実現される場合である。その仕上げられた実例は美的なものの象徴としての美[美しいもの]である。嗜好[趣味；Geschmack]が諸眼を可知のもの[英知的なもの；das Intelligibele]に向かって高め（*hinaussiehet* [外を見遣る；めざす]）、そして、ただ嗜好を通じてのみわれわれの超感性的なものへの熱望の一つの形象化が許容される。ここで明白なものは、象徴のラディカルに感性的なものだけでなく（つまり、その感性的な本性が留保されること

が可能ではなく), その予感的な, ノスタルジック [回顧的] な性格, 理念へのその熱望, 動詞 *hinaussehen* [めざす] がサンクションを与える運動でもある (AK V, 353)¹¹。[382]

象徴化するということは, ゲーテが手続きの理論的な様態への, 自然の認識の領域への移転をなした, 手続きの詩的な一つの様態である——と言っても, 彼の自然諸研究においては, 言葉 [単語] と事物との関係はその固有の諸困難の中に置かれているのではあるが——「象徴は, 言語 (ランゲージ) の本体の中の一つの高められた種類の一つの実験に対応し, そこでは, 普遍的妥当性の法則が有機的に自己を顕示する¹²。」ゲーテの形態学的思想 [思考] を象徴的と特徴付けることは, 言われたことが, どのように言われたかという様態から分離されて受け取られることは出来ない——認識的関心が現れることとその再興との間の移行に移動している (それらを相関物たちとして提示する一つの公式の追求を通じて)————ということの意味する。「詩歌は諸直喩と比喩的な諸表現に関して, 比喩的な諸利点を持つが, それらはその他総ての種類の諸言語 (ランゲージ) に対する関係を通じて大いに大きい長所だ。というのは, それは各々一つの諸形象に対して, 各々一つの諸関係に対して, そのそれぞれの型, およびその適切さの程度に応じて, 奉仕することができるからだ。それは, 精神的なものを物体 [身体] 的なものと比べ, あるいは, その逆である。思考 [思想] を閃光 [稲妻] と, 閃光 [稲妻]

¹¹ [訳注] 「趣味がめざすものは英知的なものであり, すなわち, われわれの上級認識諸能力すらこれと合致するものであって, この英知的なものがなければ, これらの上級認識能力の本性の間には, 趣味が行う要求と比較すれば, ただ矛盾だけが生じるであろう。」[牧野英二訳「判断力批判 上」『カント全集 8』岩波書店, 1999, p. 261]

¹² [原書注番号 285] Manfred Jurgensen, *Symbol als Idee. Studien zu Goethes Ästhetik* [『理念としての象徴——ゲーテの美学への諸研究』], Francke Verlag, Bern und München, 1968, p. 38. Ferdinand Weinhandl, *op. cit.* は, ゲーテにおける象徴をカントにおける美的理念に接近させつつ, それを *aufschließende Wort* [鍵を開ける語] と特徴づけ, また, 問題になっているのが言語 (ランゲージ) との一つの経験であることも強調する。

を思考と[比較し], かくてそのような様態で, 世界の諸対象の動きの中の生はより良い様式で表現される。哲学はその最も高められた点において, やはり比喩的な諸表現および直喩を必要とすることは, われわれが幾度も言及し, 追及し, 擁護した象徴学 (simbólica; symbolics) が証言する通りである。しかし, 哲学的諸学派は, 歴史がわれわれに教える如く, 一般に, — その創立者たちと領袖たちの種類と分野に応じて — ただ単に一方向的な諸象徴のみを用いることの結果を蒙っている — それは, 〈全体〉を表現し支配しようとし, 特に, ある者たちは物[身]体的なものを精神的な諸象徴を通じて完全に指示しようと望み, 他の者たちは精神的なものを物[身]体的な諸象徴により指示したいと望むからだ。このような仕方では, 諸対象は決して穿入されることはないだろう (……)」(Materialien, HA 14, pp. 105-106¹³)。諸象徴の一方向性は分離的, 純粹化的な行為の諸表出の一つであり, そこに哲学的な固有の行為が存しているように見える。ゲーテはその認識的な根源的な不十分さを証示したいと欲するが, 一方向的な諸象徴は決して諸対象に穿入することはできないだろうが, まさにそれこそが哲学者も, 自然の研究者も追求すべきものののだ — すなわち, 諸対象の穿入 (貫通, 洞察; *Durchdringung*) だ。

1801年11月23日, ゲーテはヤコービに一通の手紙を送り, そこで解明

¹³ [訳注] 「詩は比喩や比喩的表現という点では, それ以外のすべての語り方に対して非常に大きな利点をもっている。それというのも, 詩はあらゆる形象, あらゆる比較を思いどおりに用いることができるからである。詩は精神的なものを身体的なものと, また逆に, 身体的なものを精神的なものと比較することができる。思想を稲妻と, 稲妻を思想と比較するといったように。こうした比較によって森羅万象の生命の交流が最もよく表現される。哲学もまたその最高の境位では比喩的表現や比喩を必要とする。それは, われわれがしばしば言及し非難し, また弁護したあの象徴法が託すところである。/しかし歴史が教えるところ, 哲学の諸派にはその始祖と主だった教師の資質にしたがって, 全体を表現, 支配するのに, たいていの場合ただ一面的な象徴を用いる通弊が見られる。なかでもある者は, 物的な事物をひたすら精神的な象徴によって, また精神的な事物をひたすら物質的な象徴によって表わそうとする。そうすると対象がますますところなく把握されることはない。」[南大路・嶋田・中嶋訳『色彩論 第二巻 歴史篇』pp. 223-4]

的に哲学と遭遇する諸関係を定式化するが、まさに分離的、留保的な思考の経験こそが、彼には異質のものであり、彼には、部分的であるがゆえに喚起され、偽りを誘う一つの困難に見えるところのものなのだ。自らを生きて保つためには思想〔思考〕は、あらゆる瞬間に総ての存在を動かしている諸運動——再合一し分離する——を再興するべきであろうし、不断にそれらのリズムカルな諸移行を実現すべきであろう——原初的な感覚（これはスピノザの諸徴を帯びているが）に身体を与えつつ——。その感覚とは、**われわれは自然と一つのものである**というものだ——「貴方は容易に、私が哲学に関して振舞う様態について観念を持つことができます。哲学が自分を特に分離に捧げるとき、私はそれを了解することができませんで、自然に、それは時々私に——私の自然の途において私を乱して——偏見を抱かせたと言うことができます。しかし哲学が再合一し、あるいは、より適切に言って、それに向かうとき、われわれの原初的な感覚、つまり**われわれは自然と一つのものである**という、深い静かな一つの直観の中の感覚——その永久の *συγκρισις* と *διακρισις* の中でわれわれは一つの聖なる生^{せい}を感覚するのですが（われわれにそのような一つの生^{せい}が許されていないときでさえ）——を確証し転換するとき、哲学は歓迎されるもので、貴方は、それゆえ、正当にも貴方の仕事への私の関与を期待することができるのです」（HA/B 2, 423）¹⁴。その最も高揚

¹⁴ [訳注] »Wie ich mich zur Philosophie verhalte kannst du leicht auch denken. Wenn sie sich vorzüglich aufs Trennen legt, so kann ich mit ihr nicht zurechte kommen und ich kann wohl sagen: sie hat mir mitunter geschadet, indem sie mich in meinem natürlichen Gang störte; wenn sie aber vereint, oder vielmehr wenn sie unsere ursprüngliche Empfindung als seien wir mit der Natur eins, erhöht, sichert und in ein tiefes, ruhiges Anschauen verwandelt, in dessen immerwährender *συγκρισις* und *διακρισις* wir ein göttliches Leben fühlen, wenn uns ein solches zu führen auch nicht erlaubt ist, dann ist sie mir willkommen und du kannst meinen Anteil an deinen Arbeiten darnach berechnen. ¶;「私が哲学とどう関わっているかについて貴方は容易に考えることができます。それがもたら分離をこととする限り、私はそれとうまく付き合うことはできませんで、次のように言うことも優にできるのです——哲学は、私の自然な道行におい

した形態〔形式〕においては哲学は、実際、象徴的なもので、〈全体〉を追求し、〈全体〉の複雑性を、一つの形象の執拗な部分性によって置き換えることはできない。象徴は一つの発見的方法を証言し、再遭遇を厚遇する——われわれはその到達範囲がわれわれの選択の恣意性には依存せず、われわれが言う権能の無いまま信頼する法則に依存するのだということを知るがゆえに——。哲学者は象徴の言語を語らせ、彼が語る対話（カウルバッハが *Philosophie der Beschreibung* [『記述の哲学』] で言うところの *die Rede* [語り]) を聞かせなければならない——自らを提示しつつ、彼は一人の他の者を提示するのだ——。かくして、象徴が表出的かつ簡潔にするに到る諸提示の一種の語りがあることになり、哲学者はその語りを、*Geschichte* [語り、歴史] を分け持って、自分が熟慮するもの、および自分の生の固有の感情に値するようにならなければならないだろう。「私は学ばない、私は語る」——これはモンテーニュから翻訳され、それをゲーテは *Principes* (HA 13, p. 228) に自分の語りへの刻銘としてとったもので、その中では、自叙伝と認識の理論、彼にとっては、その間で形態学的諸研究が均衡した両極端を代表した二人の研究者、キュヴィエとジョフロワ・サンティレール、の間の論争の記述、そして自分自身の諸研究の提示が相互に交錯し照明し合い、それらは、ゲーテがそう言うのを好んだように、互いに諸相関物 (correlatos; the correlated) になった。かくてまた、象徴は説明し、教えはしない。[383]

思想〔思考〕を閃光〔稲妻〕と比較し、閃光〔稲妻〕を思想〔思考〕と比較

て混乱させて私を時折、傷つけたのだと。しかしそれが合一させるとき、あるいはむしろそれがわれわれの根源的な、われわれが自然と一つのものだという感性を高め、確実にし、一つの深い静かな直観に転換するとき、その永遠の *συγκρισις* と *διακρισις* においてわれわれは一つの神的な生を感じるのですが——われわれが一つのそのような生を送ることが許されていない場合さえ——、そのとき哲学は私には歓迎すべきもので、貴方は貴方の仕事への私の関与を当てにすることができるのです。」(拙訳)

するにあたり、ゲーテは公平のために、不可視のものの可視のものへの運動、および逆の運動を、あたかも変態的な諸運動の諸表現 — *vis centrifuga* [遠心力] および *vis centripeta* [求心力] — であるかのように確立する。その相互性が証示するものは、人間の魂には一つの〈知られた—知られていないもの〉があり、それが世界の中の一つの〈知られた—知られていないもの〉と遭遇する、と言うことは、人間の魂と世界は一つの *Gemeisames* [共通のもの] へと向かう傾向があるということで、それをクルト・リーツラーは大いなる明晰さをもって提示している — 「詩人は魂を熟慮し、それを世界として認識し、世界を魂として認識する。統一性はその秘密だ。ゲーテはその諸箴言で芸術を、『対象の中の知られていない一つの法則 — それは主体の内部の知られていない一つの法則に照応する —』の仲介者と呼ぶ。(……) 詩人の熟慮と認識は諸感覚と魂との再認識だ。再認識されるものは対象としての対象ではない。熟慮されたもの、認識されたもの、再認識されたものは、ゲーテの『認識されない法則』である — すなわち、世界としての魂、魂としての世界だ」(*op. cit.*, 253-254)。ゲーテにおけるシンボルの理解は、しかしながら、主観性の構造を前にした一つの態度に起源を持っているが、それは、批判的な要請にも関わらず、『判断力批判』の§ 59の「行間翻訳・注解本」においても出会うし、それは魂がそれ自身の語源を実現する能力があることを想定するのだ(ノヴァーリスが *Allgemeine Brouillon* で用いた攪乱的な表現に従えば) — 「魂は各々の概念において発生的—直感的な言葉[語](定式)を切望する。[問題になっているのは]その語源の行為だ。魂が一つの概念を抱く[把握する]というのは、それを打ち負かして、あらゆる仕方でそれを精神と物質に転換できるときだ。一つの概念ないし一つの特定のイメージを普遍化することあるいは哲学化する(*filosofistar*; to philosophize) という行為は、一つの〈エーテル化すること [*tornar etéreo, Ätherisieren, make ethereal*)], 一つの〈空気化すること [*tornar aéreo; Verluftisieren, make aerial, etherify*)] — 一つの〈一

つの特定の事物あるいは一つの個体を精神化すること [espiritualisar, Vergeistern, spiritualize]》—— 以上のものではない。」またこれと反対の一つの過程も存在する」(Schriften 3, p. 431)¹⁵。われわれは魂 (die Seele) をカントの美的な意味において Geist [精神] と同一視することを止めることはできない。すなわち、カントによれば、それは、各々の概念においてその定式、その直感的で生成的な言葉 [単語] —— ゲーテのタームでは *Mittelpunkt* [中間点] —— を熱望し、それを見ることに達しようとする魂の想像力 [a imaginação anímica] である。ノヴァーリスは、敢て、カントが言うに到らなかった (そこがその場でなかったがゆえに —— cf. 『判断力批判』 § 59, AK V, 352¹⁶) ことを言うように見えるが、それが意味するのは、言葉 [単語] は概念の提示だということだ。自分の流儀で彼は言葉 [単語] は概念を提示すると宣言する —— 魂は各々の概念において言葉 [単語] を熱望し、概念の中での生きた分割を熱望する —— 精神と物質がその中で活動しているの

¹⁵ [訳注] 《Die Seele strebt bey jedem Begriffe nach einem genetischintuitiven Worte (leine)r Formel) — Ihr Etymologisiren. Sie versteht einen Begriff, wenn sie ihn fertig machen und auf alle Weise behandeln kann, zu Geist und zu Materie machen. Das Universalisiren, oder philosophistisiren eines specifickn Begriffs oder Bildes ist nichts, als ein Ätherisiren, ein Verluftigen — Vergeistern eines Specificums oder Individuums. Es giebt auch einen entgegengesetzten Process.》[828. — 「魂は各々の概念において一つの発生的—直感的な言葉 [語] (一つの定式) を切望する —— その語源化することだ。魂が一つの概念を理解するというのは、それが概念を処理し、あらゆる仕方に取り扱い、精神と物質にすることができるときだ。一つの特定の概念ないし像を〈普遍化すること〉あるいは〈活哲学化すること*〉は、一つの特殊物ないし個物を〈エーテル化すること〉、〈空気化すること〉 —— 〈精神化すること〉 —— 以外の何物でもないのだ。一つのこれと対抗的な過程も存在する。」(拙訳)]

*「活哲学化する」と仮に訳した “Philosophistieren” という語についてノヴァーリスはこう説明する —— 「Philosophistieren とは dephlegmatisieren [脱粘液質化] —— 活性化 —— である。…: ようやく最近、人は哲学を生き生きとした状態で観察することを始めた …」(《Logologische Fragmente [「ロゴロギー的断片」]》15, Schriften 2, S. 526; 拙訳)

¹⁶ [訳注] 脚注 8 の下線部参照。

だ——。魂は概念の純粹性を乱し、自らの出生の諸兆表を開示すべく努める——それは、住み込んでいる、あるいはそれに向かって概念がなびく——魂の固有の語源的な招命に従いつつ——傾向のある直観的な生成である。われわれにとって、それ以上に書くことができないように見える、それを書く唯一の様式だが、魂は総ての事物でなければならない。それゆえ、魂が一つの概念を理解するのはただそれを極化する——それから偽りの固着性を取り去って——ときだけ、それに対して、その中で自分の語源的な進歩がなされるところの言語を話すことを教えるときだけであり、それはその精神および物質における変態を通じてであり、それをそれに内在的な二重性——言語の解読不能の二重性——によって防護する——つまり、象徴は常に不純なのだ。別言すれば、魂が概念を理解するのはただ、それを象徴的な形態〔形式〕として見るとき、それを象徴的な形態〔形式〕に転換するときだけだ。この断片の第二部は、想像力の2つの固有の運動に関わるもので、それは、次の転換（常に終わりの無い）に資するものだ——つまり、一つの独自の〔特殊の〕事物の、一つの個物の、精神化、あるいは、想像力の非物質化の行為——エーテル的な、空気の——とノヴァーリスは言う。他の運動はただ可能なものとして予告されるが、それはわれわれが、一つの普遍を特殊化すること、一つの非物質的なものを土に帰着させ、それに重さを帰すること、ととることができる。それらはゲーテの諸言葉〔単語〕である可能性があり、彼にとっては *Urphenomen*〔原現象〕の定式は常に極性のそれなのだ——対立物たちの相補性と諸リズムの絡み合い、収縮、拡大, *syncrisis*, *diacrisis*——……

[384]

[385] 諸象徴が在ると考えることは、在るものに対する非抵抗の一つの行使を、好意的で承認的な一つの性向を前提する。われわれは、ゲーテにおいては象徴は翻訳の形式の下で考えられなければならないことを知っている——自然は、われわれの純粹な諸概念が決して便宜的に翻訳できないだろう一つの言語（ランゲージュ）を話す（そして、カント自身がそのような断

定を *K.Uk.* で承認することができるように思われる)。ゲーテは、カントの如く、—— 同じ用語法を厳密に用いてはいないが —— 反省的運動を総ての認識行為の条件としている。《Die Aufgabe des Übersetzers[翻訳者の課題]》で W. ベンヤミンは、翻訳の言語と原本の言語との、純粹言語の *medium* [媒体] の中での関係を主題化しつつ、象徴化するもの [simbolizante] と象徴化されるもの [simbolizado] との一つの区別を導入するが、それは、既にゲーテにおいて象徴について主張されたことの理解を促進する。象徴化するもの (*Symbolisierend*) は、任意の言語において、—— 特権的に、一つの外来の言語の遭遇しそれを転換するべく試みる瞬間に —— 象徴化されるもの (*Symbolisiert*) の顕示への道であるものに言及するものだ。ベンヤミンにとって、象徴は一つの歴史的な現実性を持ち、出現と消失とを、同時に再興と未完成と（これらは、厳密には理念の起源に適用される諸属性だ —— *Die Ursprung des deutschen Trauerspiels* [『ドイツ悲劇の根源』] で証示されているように）を、経験する。大文字で名詞としてとられた象徴化されるもの [*Symbolisiert*] は総ての言語的な構成に起源を付与するものであり、総ての言語の起動的な (*incoactivo; inchoative*) 点、および、総ての再合一のユートピア的な場所、諸言語間の異邦性の救済者、翻訳することの行為を通じての発見に捧げられる関係が設定される *medium* [媒体] である。動詞の過去分詞が象徴化するように、象徴化されるもの (*symbolisiert*) は予備的な、不完全な固定化、起源の嵌め込みを指示するが、それは一定の言語的な一つの構成における装飾のように輝くことは、例えばランボーの韻文 *L'Étoile a pleuré rose au couer de tes oreilles* [星は薔薇色に泣いた 君の耳の中核で]¹⁷ における如くである。ゲーテが、エッカーマンとの 1826 年 7 月 26 日の対話で象徴学に（諸劇作に関して）与えた定義は、この

¹⁷ [訳注] 宇佐美斉訳『ランボー全詩集』ちくま文庫, p. 141; "The star has wept rose-colour in the heart of your ears" [translated by Oliver Bernard: Arthur Rimbaud, *Collected Poems* (1962)]

Simbolizado [大文字の、象徴化されるもの] と *simbolizado* [小文字の、象徴化されるもの] との間の関係の当惑を証言する — 「各々の活動はそれ自身のゆえに重要であるべきであり、また、より重要な他の活動に向かうべきです」 (AA 24, p. 179)¹⁸。

ゲーテの思想 [思考] において、象徴は、従って、一つの発見的かつ予想的な、幻視的ですからある価値を持ち、魂の固有の *energeia* [エネルゲイア] を、リズムカルな *energeia* を、顕示するが、それは、ノヴァーリス的なタームで言うと、エーテル的なものと地上的なものとの間の一つの戯れ [プレー]、集めかつ開始する、喚起的かつ模倣的な戯れだ。それゆえ、象徴は — われわれは *Urphänomen* [原現象] についてなされた特徴づけを思い出すべきだろうが —、本来は一つの表象 [提示] ではなく、カントにとって一つの表象であったものの側にはなく、一つの生産的な形式、一つの原初的で原型的な形象、〈全体〉の一つの垣間見、同時に活性化のかつノスタルジックな垣間見である。その終極性は内的で、宇宙的だ — 思考的なエネルギーを維持し、思想 [思考] を再生産し維持し、世界との共感を再興する。*Kritik der Urteilskraft* [『判断力批判』] の § 17 で *Bild* [形象] が考察される様態は、次のことを想定させる。すなわち、カントにとってもまた、それは一つの表象以上のものであり、自然の、および人間の一つの可塑的なプロジェクトの遁走点 [o ponto da fuga; the point of flight] を指示するものだ。われわれは、カントにおいては2つの互いに相容れない自然についての展望がある

¹⁸ [訳注] 《Ich [Eckermann] fragte, wie ein Stück beschaffen sein müsse, um theatralisch zu sein./ 〈Es muß symbolisch sein.... Das heißt: jede Handlung muß an sich bedeutend sein und auf eine noch wichtigere hinzielen.〉》; 「私 [エッカーマン] は尋ねた — 一つの戯曲作品が演劇的であるためには、どのようでなければならないのでしょうか、と。 — 『それは象徴的でなければならないのです。……すなわち、各々の行動はそれ自体で重要であり、そして一つより重要な行動を指し示さなければならないのです。』」 (拙訳)

ことを知っている — 1. 概念として、諸関係の一つの体系、すなわち、主体の統制化的、転換化的な諸操作を通じて構成された一つの対象 [客体] ; 2. 理念として、一つの多様な〈全体〉、一つの形態の充実、いかなる操作も超える諸豊穡さ、形成の原理 — そこにおいては主体は一つの親近性を認識する (自己を再認識しつつ) —。カントはかくて自然を — あたかも認識し得る (cognoscível; cognoscible) かのように — その自律性において見るに到る — 一つの独自の言語 (ランゲージ) を話す一つの芸術作品として、何らかの創造的な行為の結果、人間による生産との類比により、自然の《技術》として —。しかし、その技術は、 — カントがまさにその類比の不都合な点を強調する、すなわち、それが生命自体を、自然の理解を超えた創造的過剰を、説明することができないのだが —、実際にメカニズムの超越を認めず、単にわれわれには、われわれの保有する構造的諸条件をもっては、その複合的なメカニズムを決定するに到らないことを示唆するだけだ (K.Uk. の §§ 80 および 82 を参照)。ゲーテは人間がその複雑性を理解するのに成功するとは考えず、むしろ自然は一つの機械的な体系でないと確信しており (単に一つの体系 [システム] でない)、その言語 (ランゲージ) は一つの〈全体〉の全体性の言語 (ランゲージ) であり、特定の生きた一つの存在によるその翻訳は常に部分的なものであろう。その部分的なものは、〈全体〉の全体性を再合一し提示しようと努力するが、それは象徴である。すなわち、理念の転換として自己を構成し、その近傍にあって、理念 — それは存続する — と共にある。

* * * * *

[3 8 7]

5. 理念であるはずのものの決定。理念, 概念, 象徴, Urphänomen の間の区別の教育, およびその正当性についての尋問。理念と原初的な諸形象。

Ewige Weberin [永遠の職女] としての理念。原初的諸形象の仲介的な役割。実例化は、理念と原初的諸形象との間の区別の解消されない性格を可視のものにする。Idee [理念] および Ideen [諸理念]。美的な経験において、理念と原初的形象の間の区別のアポリアはその極限まで導かれる。魂の工場の conclusio [結果]、結果としての象徴——変態の二重の過程——理念における顕現と形象における理念。Imago heuristica [発見的イマゴ] (Bloch [プロット])。創造的な鏡。象徴とアレゴリーの対立は理念と概念との対立を再見し、再興する。歴史の内的諸運動への後退——知ることの運動と科学の運動——概念と理念との間の、悟性と理性との間の対立を展開する目的で。概念——経験の集約。理念——経験の結果。Wozu? [どこへ]——悟性の固有の設問。Woher? [どこから]——理性の固有の設問。各々の設問の固有の諸限界。理念と〈一〉それ自体。象徴的運動の停止。象徴、概念、理念の間の諸関係についての総合。象徴の翻訳〔伝達〕的な、そして理念の非決定性を守る、自然。概念の限界付的な、安定化的本性と、移行を実現することにおけるその困難。それ自体における〈一〉と隠された法則。概念と概念化の過程。{その1}

5. 「われわれが理念（観念，イデー；ideia, idea, Idee）と呼ぶもの——それは常に自らを開示し（顕示し，現われ；manifestar-se, manifest itself, sich manifestieren），そして，従って，総ての諸開示（顕示）の法則としてわれわれの前に在るもののことだ。」「理念は永遠かつ唯一のものである——それを複数形で用いるのは正しくない。われわれがそれを知覚し，われわれがそれについて語り得るものは総べて，単に理念の諸開示（顕示，現われ；manifestações, manifestations, Manifestationen）に過ぎない。われわれは概念を定式化するが，その場合には，理念が——それ自体が——，一

つの概念だ」(*M.u.R.* 13 e 12, p. 366)¹⁹。理念は、ゲーテによれば、指示(意味付け; *significação, signification*)の絶対的なプランであり——ちょうど、各々の事物が他の事物に相互的に属するように——、現れる総てのものの形成(*formação*)と再形成(転態, 変態, 転換; *transformação*)の法則として把握されるべきである。その法則は、一つの事前可視性(*previsibilidade; previsibility*)を証示せず、諸事物の一つの状態を予兆しはせず、一つの形式[形態]の可能性を構成する。その法則は直接的に認識され、定義不可能である——と言うのも、その定義は必然的に、マックス・シェラーが言うように、一つの *circulus in definiendo* [被定義項における循環]に導くだろうからだ——なぜならば、まさにそれこそが、総ての表明されたものたち(*os enunciados; the enunciated*)を可能ならしめるものであり、それこそが諸定義の存在を可能にするものだから——定義不可能であり、従って、概念と比較することが不可能である、あるいは、理念は一つの概念に転換される、すなわち、理念の定義を試みるときわれわれは一つの転態が生じることを見出し、理念を失うのだから (*cf. op. cit.*, p. 85)。ここでわれわれ

¹⁹ [訳注] [13] 《Was man Idee nennt: das, was immer zur Erscheinung kommt und daher als Gesetz aller Erscheinungen uns entgegentritt.》[12]《Die Idee ist ewig und einzig; daß wir auch den Plural brauchen, ist nicht wohlgetan. Alles, was wir gewahr werden und wovon wir reden können, sind nur Manifestationen der Idee; Begriffe sprechen wir aus, und insofern ist die Idee selbst ein Begriff.》; [13] 「理念と呼ばれるもの、それはつねに現象として現われ、それゆえにわたしたちにとってすべての現象の法則と感じられるものである。」; [12] 「理念は永遠であり、唯一である。わたしたちは理念について複数形を用いることもあるが、それは上出来の表現とは言えない。わたしたちが感知するもの、またわたしたちの話す対象となり得るものは、すべて理念の示現に過ぎない。さまぎまの観念をわたしたちは口にする。そしてその限りにおいて、理念自身が一つの観念となる。」[岩崎英二郎・関楠生訳「箴言と省察」, 『ゲーテ全集 13』, pp. 204, 205]; [13] 「人が理念と呼ぶもの、それは常に現象に達するものであり、従って総ての諸現象の法則としてわれわれに対してたち現れるものだ。」; [12] 「理念は永遠で唯一のものである。それゆえ、われわれが複数形も用いるということは、あまり良い遣り方ではない。われわれが知覚したわれわれがそれについて語り得るものは総て、理念の示現に過ぎない。諸概念を口にする、そしてその限りにおいて理念自体が一つの概念である。」(拙訳)

は自問することが許されよう、——すなわち、もしも、まさにその制限内でいかなる概念も定義し得ないことを認めて、理念と概念との区別が正当であるものかどうか、と。われわれの理解では、われわれはわれわれをその中に留めおくべきであろう——概念を、諸事物の一つの状態の限界付けられた固定化として考え、そして、その意味で、総ての諸概念の操作的な、道具的な、予備的な、*ad hoc* な価値を強調しつつ、常にその固有の拡散に奉仕しつつ——。もしも理念が諸事物の一つの状態に関するものでなく、また一つの操作的な機能でもないならば、すなわち、もしそれが常に変わらず開示にその法則として自らを穿入させ、あらゆる瞬間に〈全体〉の融合 (*coesão; cohesion*) として常在するものとすれば、諸理念は *ante res* [事物に先立つ] ものとして、または *in re* [事物の中にある] ものとして、あるいは *post res* [事物の後に来る] ものとして見ることはできず、*cum rebus* [事物と共にある] ものとして見ることができるというのは、次のようなシェーラーのゲーテ的な表現に言う通りだ——「*ideae ante res*」[「事物に先立つ諸理念」] も、*ideae 'in' re* [事物の「中の」諸理念] も——もしもこの *'in'* [「中の」] で意味させたいことが、諸事物は理念を含んでいる、しかも、概念の内容が下位の概念の内容を含んでいるのと同じ状態で、ということならば——存在しないし、また、*ideae post res* [事物の後に来る諸理念] もまた無い——もしもそれが一つのイメージの反復を指示するものならば——。存在するのはただ *ideae 'cum' rebus* [事物「と共にある」諸理念] だけだ（同時に源初的であると共に共時[同時]的な様態において）。(...) 聖なる精神は単に、諸理念を生み出す潜在力であるに過ぎないという理由で、諸理念についてのわれわれの認識もまた再—生産[再生、複製; *Nacherzeugung* (事後の創作)]であり、それら[諸理念]があたかも『諸客体』であるかのようにするそれらの所有 [*Haben* (持つこと)] ではない。また、イメージコピー [*imagem-cópia; Abbildung* (模写)] でもない。諸理念は自然発生的に創り出されると共に、同時に『了解』される——しかし諸客体として了解されるのではない

く、むしろ、人間の内部で、再—生産を通じて了解されるのだ」(*idem*, p. 91)²⁰。自ら熟考されるまさにそのものに値するようになるゲーテの試みのもう一つの変種は何だろうか。[3 8 8]

Idee [理念] と *Urphänomen* [原現象] とをどのように区別するのか? — それらの諸関係は複雑なのに。理念は〈全体〉の総体を包括し、従ってこう言える — それはシンボルの母体 [マトリックス] であり、シンボルが、個別的な諸ケースにおいて観照可能ならしめる結びつき、〈現れ [ること]〉の内に観照可能なものとして与えられる、〈現れ [ること]〉を見る一つの様態である — 例えばメタモルフォーゼ [転態, 変態] は同時に現実的でもあればシンボリックでもあるような一つの過程だ。*Urphänomen* [原現象] は *Idee* [理念] に最も近いところに在る顕示である、あるいは、直接にその辺

²⁰ [訳注] 《Es gibt weder <ideae ante res>, noch ideae <in> re, wenn <in> besagen soll, daß die Dinge die Idee so enthalten, wie der Inhalt des Begriffes des übergeordneten* Begriffes, noch ideae post res, wenn das Abbildung heißen soll. Es gibt nur ideae <cum> rebus (gleich ursprünglich und gleichzeitig). / Da der göttliche Geist nur die Potenz ist, Ideen zu erzeugen, so ist auch unser Erkennen der Ideen Nacherzeugung, nicht Haben derselben als wären es <Gegenstände>; auch nicht Abbildung. Die Ideen sind spontan hervorgebracht und <erfaßt> zugleich; nicht aber wie Gegenstände erfaßt, sondern erfaßt im Menschen durch Nacherzeugung.》[《*Urphänomen* (=Urgestalt)》No. 13 — 「<ideae ante res>」[「事物に先立つ諸理念」] も、ideae <in> re [事物の「中の」諸理念] も — もしもこの 'in' [「中の」] で意味させたいことが、諸事物は理念を含んでいる、しかも、上位の*概念の概念の内容のように {この個所意味不詳 (引用者)} ということならば — 存在しないし、また、ideae post res [事物の後に来る諸理念] もまた無い — もしもそれが模写を言おうとするものならば — 存在するのはただ ideae 'cum' rebus [事物「と共に」ある諸理念] だけだ (同時に源初的および共時 [同時] 的に)。/ 神の精神は単に、諸理念を生み出す潜在力であるに過ぎないのであるから、諸理念についてのわれわれの認識もまた事後の創作であり、それら [諸理念] があたかも『諸客体』であるかのようにする、それらの所有 (持つこと) ではない。また、模写でもない。諸理念は自然発生的に創り出されると同時に『把握』される — しかし諸客体として把握されるのではなく、人間の内部で、事後の創作を通じて了解されるのだ」(拙訳)。

*原本では、これを「下位の (subordinado)」 (= *untergeordnet*) と訳している [本文でアンダーラインを付けて示した]。

縁に生きているものだ——ゲーテが *Die Farbenlehre* 『色彩論』の § 741 で、鉄について言うように（原書 p. 365, n. 273 で既に言及した）——「(...) 直接に理念の辺縁に生きている一つの *Urphänomen* [原現象]」。顕現の限界であるので、源初的な現象は〈全体〉に向かって再統合しそれを目指し、また他方では〈全体〉の法則を、類似の諸顕現の諸類に特殊化する。それは顕著な現象、他の諸現象の創生者、その発現の条件であり、それは直観により、リズムカルな諸関係を表現する諸イメージの下で観想される（色彩の *Urphänomen* [原現象] は明るさ/暗さの基本的な相補性であり、植物の生命のそれは超越論的な葉、収縮と拡大との諸リズムの限界である）。その本性は二重で、イメージ的な要素と意味的な——同時に身体的でありかつ非身体的な——要素とを統合している。確かにこの二重性——可視的なものの究極の限界に対して輝きを帰すること——こそが、マックス・シェーラーをして、*Urphänomen* [原現象] の——理念との対照において——積極的、非制限的な性格を語らせているのだ（cf. *ibidem*, p. 89）²¹。理念に帰せられる制

²¹ [原書注番号 286] 1822 年のテキストでゲーテは、まだ *Idee* [理念] というタームを明示的には用いていないものの、ほとんど慣習にない一つの仕方 *Urphänomen* [原現象] を基礎付けるところの、その一つの彼方 [背後] を指し示すばかりでなく、*Urphänomen* [原現象] の認識に固有の諸困難を指摘してもいる——一つの普遍的な視点と一つの特殊な視点の本性の間に区別を付けつつ——「しばしば、われわれは *Urphänomene* [諸原現象] の近くに永く留まり、尊敬に満ちた諦念をもってそれらに満足しているべきだという忠告を受けたものだった。ただし、ただちにわれわれにとって新たな諸困難が現れる [彼が数行前に語るように、われわれが問題に対する一つの解を見出したと考えていたとき、われわれは単にその問題を少しだけ多く露呈させたただけだということを発見したのだ]、というのは、一体、*Urphänomene* [諸原現象] をどこに据えるのが適切なのだろうか、——われわれの研究のための一つの基礎を見出すことができるような仕方——？これが回答だ——すなわち、自然の普遍的な教義の中にこそ *Urphänomene* [諸原現象] を見出すべきであり、それらをその特殊な諸形式 [形態] において示すのは既により困難なのだ。」[*Kritik der geologischen Theorie* [地質学理論批判]], LA I, 2, p. 306.

[訳注] 《Bei dem Urphänomen zu verweilen und sich an demselben mit verehrender Resignation zu begnügen, ist oft angeraten worden. Allein da tritt uns die neue Schwierigkeit entgegen: wo ruht denn eigentthch das Urphänomen, daß wir unsere Forschung dabei könnnten beruhen

約はただ、それが観照不可能であるということに——そして、それゆえ、その言説への抵抗（無一名 [sem-nome; nameless] に最も近い）の中に——のみ存し得るだろうが、これはわれわれが、ゲーテに倣い、*Urphänomen* [原現象] を捧げる歓喜だ——「しばしば、一つのケースが一千ものケースに匹敵し、後者を全体として自分の中に包摂しているということを知覚しない者は、われわれが *Urphänomen* [原現象] と呼んだこのものを把握し尊重する能力が無く、その者は歓喜へ、そして自分自身の、および他の人々の活用に向かって何事も推し進めることができないだろう。」(*Materialien*, HA 14, p. 9)²² *Urbild* [原形象], *Vorbild* [前形象] は、象徴的仲介を通じた理念の指示の諸様態だ。理念は範型 [パラダイム] ではなく、原初的な形象 [イ

lassen? Wir antworten darauf: in der allgemeinen Naturlehre sind die Urphänomene wohl zu finden, in der besondern sie zu bezeichnen möchte schwer werden.》[《Kritik der geologischen Theorie, besonders der von Breislak und jeder ähnlichen [地質学理論の批判——特にブライスラクのそれ、および類似の各々の理論の], Bonn 1821]——「原現象のもとに留まり、それに対して尊敬を伴った諦念に自ら満足すること、——これがしばしば勧告されてきた。だが、そこへわれわれにとって新たな困難が生じてくる——つまり、そもそも原現象なるものはどこに横たわっていて、それによってわれわれの研究を横たえることができるのか、という問題だ。われわれはそれに対してこう答えよう——一般的な自然に関する教義の中に諸原現象をよく見出すことができるであろうし、それらを特殊的な教義の中に見出すことは困難になり得るかもしれない、と。」(拙訳)

さらにシェラーの原文は次の通り——《Das Urphänomen ist — positiv, nicht einschränkend, eingrenzend wie die Idee.》[Scheler, 《Urphänomen (=Urgestalt)》No. 2, S. 89——「原現象は——積極的で、理念のように制限的でも制約的でもない。」(拙訳)]

²² これはフランシス・ベーコン [Bacon von Verulem (Francis Bacon, Baron von Berulem)] の経験主義を批判することを念頭に置いた言葉だ。

[訳注] 《Wer nicht gewahr werden kann, daß ein Fall oft tausende wert ist, und sie alle in sich schließt, wer nicht das zu fassen und zu ehren imstande ist, was wir Urphänomene genannt haben, der wird weder sich noch andern jemals etwas zur Freude und zum Nutzen fördern können.》[《Materialien zur Geschichte der Farbenlehre [色彩論の歴史のための資料]》SS. 91-2 (S. 9 でなくて)——「一つの場合がしばしば千もの場合に価いすることを、また、それら総てを自らの内に包括していることを認識できない者は、われわれが原現象と呼んできたものを把握することも、尊重することでもできないし、その人はおよそ、自らをも、他の人をも何か喜びや役立ちに対して進めることができないだろう。」(拙訳)]

メージ]でもなく、それらによって提示されているものだ。言わば理念は、特定化されない母体[マトリックス]、原初的な統一性ないし分割、すなわち原初的な織り交ぜ、永遠の織女, *die ewige Weberin* だ。他の事物に転形されるものを規定するための最善の様態は、われわれが一度その決定を試みるがはやいか、——それは、理念なのであるが、——それは、形象[イメージ]によるその提示の途を通ることを通じてなのだが——その個別的な実現に役立つ若干の諸現象の生成における生成的な諸モデルを追求しつつ、ゲーテの美しい表現によれば「出来事に転換された不滅のもの」を追求しつつ——、確かなことは、*Urphänomen* [原現象]と *Idee* [理念] との間の区別の大きな困難がわれわれに向かって、——われわれがそれを実例化しようと試みるたびに——解消されないところのものとしてやってくるということだ。諸色彩の理論の枠内では、〈明るさ/暗さ〉の対立は基本的な相補性、色彩の *Urphänomen* である。一方、光の方も、しばしば理念の直喩 [*simile, simile*] (*Gleichnis*) として考えられる。*Urpflanze* [原植物] は一つの理念なのだろうか、それとも一つの原初的な現象なのか？ 原理的にはそれは一つの理念、植物の理念、であるものだが、葉がそのリズムカルな構造を通じて *Urphänomen* として提示するのだ。しかしながら、われわれがその区別を疑い始めるのは、ゲーテが理念を純粋な独自性として、数多[複数]性を縮減して考える瞬間だ——*Ideen* [諸理念] と言うことは、*Idee* を複数で言うことは、相応しくないのだ。[390]

一つの範例的な仕方で美的経験——よりよく言えば、美しいもの（美；*o belo, das Schöne, the beautiful*）——はこれら総ての諸設問を相互配置することになる、あるいは、ベンヤミンが《*Goethes Wahlverwandtschaften* [「ゲーテの『親和力』」]》(I. 1, p. 196)²³で言うように、美は理念を可視的に

²³ [訳注] 《Niemals noch wurde ein wahres Kunstwerk erfaßt, denn wo es unausweichlich als Geheimnis sich darstellte. Nicht anders nämlich ist jener Gegenstand zu bezeichnen, dem im letzten die Hülle wesentlich ist. Weil nur das Schöne und außer ihm nichts verhüllend und verhüllt

するのではなく、理念の神秘を——ということは、それと、現れるものとの関係を——可視的にするのだ。実際、美しいものが可視的なことは正当であ

wesentlich zu Sein vermag, liegt im Geheimnis der göttliche Seinsgrund der Schönheit. So ist denn der Schein in ihr eben dies: nicht die überflüssige Verhüllung der Dinge an sich, sondern die notwendige von Dingen für uns. Göttlich notwendig ist solche Verhüllung zu Zeiten, wie denn göttlich bedingt ist, daß, zur Unzeit enthüllt, in nichts jenes Unscheinbare sich verflüchtigt, womit Offenbarung die Geheimnisse ablöst. Kants Lehre, daß ein Relationscharakter die Grundlage der Schönheit sei, setzt demnach in einer sehr viel höhern Sphäre als der psychologischen siegreich ihre methodischen Tendenzen durch. Alle Schönheit hält wie die Offenbarung geschichtsphilosophische Ordnungen in sich. Denn sie macht nicht die Idee sichtbar, sondern deren Geheimnis.》(アンダーラインは、原本・翻訳とも、引用者の付加);「芸術作品が不可避的に秘密として現われた場合以外に、いまだかつて真の芸術作品が把握されたことは一度もなかった。言いかえれば、究極において被いが本質的なものであるような対象は、他に言い表わしようがない。ただ美なるものだけが、被いつつ被われた状態で本質的であることができ、しかも美なるもの以外のなにもものそのようにあることはできないがゆえに、秘密のなかにこそ美の神秘的な存在根拠があるのだ。したがって、美における仮象とは、まさに次のことを謂っている——事物を不必要に被うものそれ自体ではなく、われわれにとって必要不可欠なものとして事物を被うもの {諸事物ではなく、その余分な覆いではなく、われわれにとっての諸事物の必然的な覆い(?)}、これが美における仮像にほかならない。そのような被いはときとして神秘的に必然のものである。というのも、時宜を得ず被いを取り除かれるとあの目立たぬものが雲散霧消し、それによって啓示が秘密にとってかわることになるのは、神秘的な原因によっているからだ。美の根拠をなすものは関係性であるというカントの説『判断力批判』第一部第一篇第一章の第一〇——七節参照)は、したがって、心理学的な領域よりもはるかに高次の領域において、その方法論的な意図を上首尾に貫徹する。あらゆる美は、啓示と同じく、歴史哲学的な秩序を内に含んでいる。なぜなら、美は理念を、ではなく、その秘密を、目に見えるものにするからである。」(「ゲーテの『親和力』」, 浅井健二郎編訳・久保哲司訳『ベンヤミン・コレクション 1』, 上掲書, pp.172-3; { } 内は引用者の付加。上掲書の [] 内は原訳書の注);「真の芸術作品というものは、それが避けがたく秘密として自らを提示するばあい以外では、把握されたことはまだいこともなかった。すなわち、結局はヴェールがそのものにとって本質的であるような対象物とは、ほかに言い表わしようがないからである。ただ美しいものだけが、そしてただそれだけが、ヴェールでおおいながら、またヴェールにおおわれたまま本質的に存在することができるのだから、美の神秘的な存在根拠は秘密のなかにある、ということになる。かくして美における仮象とは、事物そのものを余計なヴェールでおおうことではなく、それがぼくたちにとって必要だから事物をヴェールでおおうこと、これこそ仮象の意味するところである。このようにヴェールでおおうことは時として絶対的に必要である。それはまた結局、不都合な時にヴェールを取ると、秘密にとって代って啓示されるべき、あの決して姿を見せることのな

るが、しかしまた、美しいものが一つの沈黙の経験、不分明化 (ofuscação; obfuscation) の一つの形式 [形態] であることも正当であって、これはゲーテが *Hülle* (覆い, 外皮) と *Inbegriff* (本質, 精髓) というタームで特徴づけた二重性だ (cf. 《Der Sammlung》 HA 12, p. 196)²⁴ — すなわち、覆

いものが逃げうせて無に帰することが、絶対的に条件づけられているのと同じである。関連性格こそ美の根本原理なり、というカントの説は、したがって、心理学的な領域よりもはるかに高次の領域において、その方法論的な傾向を貫徹して勝利をおさめる。すべて美は、啓示と同じように歴史哲学的な諸秩序を内蔵している。なぜならば美は、理念をではなく、むしろ理念の秘密を目に見えるものにするからである。」(「ゲーテの『親和力』について」高木久夫編集・解説『ヴァルター・ベンヤミン著作集 5』, pp. 117-8); 「いまだ一度として真の芸術作品なるものが把握されたことはなかった、ただし、それが不可避免的に秘密として現われた場合は別としてである。というのも、窮極において被いがか本質的なものであるような対象は、他には言い表わしようがないのだ。美なるものだけが被い被われながら本質的であることができるので、他にはなにひとつそういうものはないのだから、秘密のなかに美の神秘的な存在根拠があるのだ。そういうわけで美のなかなの仮象とはまさにこういうことなのだ — 事物を必要もないのに被いでくるむことそのことではなく、事物にわれわれにとって必要不可欠な被いをするのである。このように被いで包むことは時として神かけて必要なものであり、それと同じように、ときならぬ時に被いを除かれると、かの目立たぬものが雲散霧消して無と化し、それによって啓示が秘密にとって代るということも、神かけての条件となっているのである。関係という性格が美の基盤であるというカントの説は、したがって心理学の世界よりもはるかに高次の世界で、その方法的な諸傾向を成功裡に貫徹するのだ。すべて美は啓示と同じく歴史哲学的な秩序を内に含んでいる。なぜなら美が目に見せてくれるものは理念ではなく、その秘密なのだから。」(藤本淳雄訳『ゲーテの『親和力』』『ゲーテ全集 別巻』, p. 293)

²⁴ [訳注] 《Schönheit kommt von Schein, sie ist ein Schein und kann als das höchste Ziel der Kunst nicht gelten, das vollkommen Charakteristische nur verdient schön genannt zu werden, ohne Charakter gibt es keine Schönheit.../... das Schöne charakteristisch sein müsse, so folgt doch nur daraus, daß das Charakteristische den Schönen allenfalls zu Grunde liege, keineswegs aber, daß es eins mit dem Charakteristischen sei. Der Charakter verhält sich zum Schönen wie das Skelett zum lebendigen Menschen. Niemand wird leugnen, daß der Knochenbau zum Grunde aller hoch organisierten Gestalt liege, er begründet, er bestimmt die Gestalt, er ist aber nicht die Gestalt selbst, und noch weniger bewirkt er die letzte Erscheinung, die wir, als Inbegriff und Hülle eines organischen Ganzen, Schöhhheit nennen.》[《Der Sammler und die Seinigen [収集家とその友人達]》 HA 12, S. 75 (原書 S. 196 は誤記?)] — 「美 (美しさ) は外観 (見かけ, 上辺) から生じ、それは外観であり、しかも芸術の最高の目標の資格を得るに値しない — 完全に性格的なものだけが美しいと呼ばれるに値するのであり、性格無しにはいかなる美も存在しない。... 美しいものは性格的でなければならない。だが、そこから帰結するのはただ、性格的

いと精髓,あるいはその覆いに包まれた本質で,これは後にヴァルター・ベンヤミンによって *Hülle* (覆い, 外皮) と *Ausdruckslose* (無一表現, 表現の無いもの) として再び取り上げられたもので (*op. cit.*, pp. 194-195)²⁵, こ

なものがいずれにしても基底に横たわっているということのみであって,決して,美しいものが性格的なものと同体だということではない。性格の美しいものに対する関係は骨格が生きた人間に対するのと同じである。誰も,骨格の構成が総ての高度に組織された形姿の基礎に在り,それが形姿を基礎付け,規定していることを否定しないが,それは形姿そのものでなく,ましてやそれがあの最終的な現われ——つまり,われわれが,一つの有機的〈全体〉の精髓および外皮(覆い)として,美と呼ぶ現象——を発現させはしないのだ。】(拙訳)

- ²⁵ [訳注] 《Demnach bleibt in aller Schönheit der Kunst jener Schein, will sagen jenes Streifen und Grenzen ans Leben noch wohnen und sie ist ohne diesen nicht möglich. Nicht aber umfaßt derselbe ihr Wesen. Dieses weist vielmehr tiefer hinab auf dasjenige, was am Kunstwerk im Gegensatz zum Schein als das Ausdruckslose bezeichnet werden darf, außerhalb dieses Gegensatzes aber in der Kunst weder vorkommt, noch eindeutig benannt werden kann. Zum Schein nämlich steht das Ausdruckslose, wiewohl im Gegensatz, doch in derart notwendigem Verhältnis, daß eben das Schöne, ob auch selber nicht Schein, aufhört ein wesentlich Schönes zu sein, wenn der Schein von ihm schwindet. Denn dieser gehört ihm zu als die Hülle und als das Wesensgesetz der Schönheit zeigt sich somit, daß sie als solche nur im Verhüllten erscheint.》[S. 194] 「したがって, 芸術のあらゆる美のなかには, かの仮象が, とはつまり生に触れつつ境を接するものが, 宿り続けており, この仮象なくして芸術の美はありえない。だが, 仮象が芸術の美の本質を包括しているというのではない。この本質はむしろもっと深く, 芸術作品において仮象に対立して〈表現をもたぬもの〉と言ひ表わすことができるもの, しかしこの対立関係において以外には芸術のなかに現われることはなく, また一義的に名づけることもできないもの, を指し示している。すなわち, 仮象に対してこの表現をもたぬものは, 対立という形においてはあるが必然的な関係にあり, その結果, まさに美なるものは, それ自身は仮象ではないとはいえ, 自身から仮象が消え去れば本質的に美しいものであることをやめる。つまり, 仮象は被いとして美に属していて, それゆえに, 美そのものは被われてあるもののうちにのみ立ち現われる, というところこそ美の根本法則にはほかならないことが明らかになる。】(「ゲーテの『親和力』, 浅井健二郎編訳・久保哲司訳『ベンヤミン・コレクション 1』, 上掲書, pp. 170-171); 「したがって芸術のあらゆる美には, あの仮象が生命と軽く触れながら境を接するといったかたちで, 宿りつつけている。そしてこれなくしては芸術の美は考えられない。しかしだからといって芸術の美の本質はこの仮象によって包括されるわけではない。美の本質はむしろ, それよりもっと底深いところにあるものをさし示している。それは芸術作品にあって仮象とは逆の, もの言わぬものと称してもよいもので, しかもそれは, この仮象との対立のそとでは, 芸術のなかに現われてもこないし, また明白な名称もつけられないものである。

すなわち、もの言わぬものは仮象にたいして対立関係にあるとはいいいながら、また必要かくべからざる関係にもあるのだ。それはちょうど、美しいものは、それ自身が仮象だというわけではないが、もしそれから仮象が消えうせるならば、本質的に美しい存在であることをやめると、同じような関係にあるからだ。というのは、この仮象はヴェールとして美しいものに所属しているからだ。したがって美の本質の掟は、美それ自体はヴェールに包まれたもののなかにのみ現われる、というように規定される。」(『ゲーテの『親和力』について』高木久夫編集・解説『ヴァルター・ベンヤミン著作集 5』, pp. 115-6); 「したがって芸術のあらゆる美しさのなかにはあの仮象が留まっている、ということは、生に紙一重で堺を接するという要素がまだ宿っているのであって、その美はこの仮象なくしてはありえないのである。しかし仮象がその美の本質を包括しているというのではない。この本質はむしろもっと深く、芸術作品において仮象とは対立して〈表現を持たぬもの〉と言い表わしてもいいようなもの、しかしこの対立の場以外には芸術のなかに現われてもこないし明確に命名することもできないものを、指し示しているのだ。つまり仮象には〈表現を持たぬもの〉が、対立する形をとってではあるが、かように必然的な関係を持っているのであって、その結果、まさしく美なるものは、みずからは仮象ではないけれども、仮象がそこから消え去れば、〈本質的に美しいもの〉であることを止めるのである。なぜならこの仮象は外皮として美なるものに属しており、これによって、美そのものは外皮に包まれたもののなかにのみ現われるということが、美の本質的法則であることが示されるのだ。」(藤本淳雄訳「ゲーテの『親和力』」『ゲーテ全集 別巻』, 潮出版社, p. 292)

なお、「表現の無いもの」については、これに先行して次のような記述がある——《Was diesem Schein Einhalt gebietet, die Bewegung bannt und der Harmonie ins Wort fällt ist das Ausdruckslose. Jenes Leben gründet das Geheimnis, dies Erstarren den Gehalt im Werke. Wie die Unterbrechung durch das gebietende Wort es vermag aus der Ausflucht eines Weibes die Wahrheit gerade da herauszuholen, wo sie unterbricht, so zwingt das Ausdruckslose die zitternde Harmonie einzuhalten und verewigt durch Seinen Einspruch ihr Beben. ... Das Ausdruckslose ist die kritische Gewalt, welche Schein vom Wesen in der Kunst zwar zu trennen nicht vermag, aber ihnen verwehrt, sich zu mischen. Diese Gewalt hat es als moralisches Wort. Im Ausdruckslosen erscheint die erhabne Gewalt des Wahren, wie es nach Gesetzen der moralischen Welt die Sprache der wirklichen bestimmt. Dieses nämlich zerschlägt was in allem schönen Schein als die Erbschaft des Chaos noch überdauert: die falsche, irrende Totalität — die absolute. Dieses erst vollendet das Werk, welches es zum Stückwerk zerschlägt, zum Fragmente der wahren Welt, zum Torso eines Symbols. Eine Kategorie der Sprache und Kunst, nicht des Werkes oder der Gattungen, ist das Ausdruckslose ...》; 「この仮象に停止を命じ、動きをやめさせて固定し、たんなる調和のお喋りの腰を折るものが、〈表現をもたぬもの〉(das Ausdruckslose) にほかならない。かの波うつ生は作品に棲まう秘密の土壌となり、この表現をもたぬものによる凝固は、作品に宿る内実を根拠づける。女の言い逃れを高飛車な言葉で中断することによって、まさにその中断したところでこの言い逃れから真実を取り出すことができるように、表現をもたぬものは震えていた調和に停止を

強要し、その異議申し立てによりこの調和の震えを永遠のものとなすのである。… 表現をもたぬものとは、芸術における本質から仮象を切り離すことはできないが、それらが混じりあうことを妨げる批判的な力なのである。この力を、表現をもたぬものは、道徳的な言葉として持っている。この表現をもたぬもののなかに、道徳的な世界の話法則にしたがって現実世界の言語を規定するような〈真なるもの〉(das Wahre)の、その崇高な力が立ち現われるのだ。すなわち、表現をもたぬもののなかに立ち現われる、この真なるものこそが、すべての美しい仮象のうちにカオスの遺産としてなお生き存えているものを、つまり偽りの、人を惑わす総体性——絶対的な総体性を、打ち砕くのである。この真なるものこそがはじめて作品を完成する。つまり、作品を打ち砕いて不完全なもの、真なる世界の一断片、あるひとつの象徴のトルソーとなすのである。表現をもたぬものは作品あるいはジャンルのカテゴリーではなく、言語と芸術の一カテゴリーであって、…」(久保哲司訳, pp. 146-7); 「この仮象を制止し、動きを封じ、調和を妨害するのが、あのもの言わぬものにほかならぬ。作品のなかに波うつ生命は、作品の秘密の根底となり、このもの言わぬ硬直が作品の内実を基礎づける。ある女の逃口上を命令的なことばによって中断し、それを中断するまさしくその場において、その逃口上のなかから真実を取りだしてることが可能であるように、もの言わぬものは、ふるえている調和をむりに制止し、異議申立を通じてその震動を永遠なものとする。… もの言わぬものは、芸術における本質と仮象とを切り離すことはできぬが、それらが混りあうことを防いでくれる批判的な力にほかならぬ。このような力を持つのは、道徳的なことばとしてのもの言わぬものである。もの言わぬもののなかには、道徳的な世界の話法則にしたがって現実世界の言語を規定するような、真理のもつ崇高な力があらわれる。すなわち、すべての美しい仮象のなかに混沌の遺産としてなお生き残っているもの、つまり、ひとを迷わすいつわりの総体——絶対的な総体を、このもの言わぬものが打ち砕くのである。もの言わぬものによって、はじめて{?}作品は完成されるのだが、その作品はそれによって打ち砕かれ、真実な世界の断片となり、ある象徴のトルソーとなる。作品とかジャンルの範疇ではなく、言語と芸術の範疇として、もの言わぬものは、…」(高木久夫編集・解説, p. 96); 「この見かけに停止を命じ、動きを縛り、調和の口を封じるのが、〈表現を持たぬもの〉である。かの生が作品における秘密の基礎となり、この凝固がその内実の基礎となる。高飛車な言葉による中断が、女の遁辞から、彼女が話を中断するまさにその場で真実を取り出すことができるように、〈表現を持たぬもの〉は、震えている調和に停止を強要し、その異議申立によってこの揺れを永遠化する。… 〈表現を持たぬもの〉は批判的な力であって、その力は芸術における本質から仮象を切り離すことはできないが、それらが混じり合うことを防止する。それは道徳的な言葉としてこうした力を持つのだ。〈表現を持たぬもの〉のなかに、道徳的な世界の法則によって現実の世界の言語を規定するような〈真なるもの〉の高貴な力が現われるのである。つまりこの〈表現を持たぬもの〉が、すべての美しい仮象の中に混沌の遺産としてなお生きながらえているもの、すなわち偽の、人を迷わす総体性——絶対的な総体性を打ち砕くのだ。これがはじめて作品を完成するのであり、これが作品を打ち砕いて寄木細工に、真なる世界の断片に、ある象徴のトルソーにするのだ。〈表現を持たぬもの〉は、作品もしくはジャンルのカテゴリーではなく、言語と芸術のカテゴリーであって、…」(藤本淳雄訳, p. 280)

れはその不可分性を証示するものだ。まさにその不可分性こそがその最大点において *Urphänomen* [原現象] と *Idee* [理念] の区別のアポリアに導くものだ。ゲーテはしばしばわれわれに、美しいものは *Urphänomen* [原現象] であると保証し、さらに、美しいものを理念と見なすことはそれを歪める、——なぜなら、それを孤立させ、分離するからだ（それが概念に転換することもあり得るとはいえ、—— そうすればコミュニケーションの諸目的にとってでは便利だ）—— と主張するところまでいく。しかし、それにも拘わらず、われわれはそれらのテキストを横切る非決定性の光輪を感じ取る —— 特に、1827年4月18日のエッカーマンとの対話がそうだ —— 「美学者たちが、〈言い得ないもの〉を、われわれが〈美しい〉という言葉で表現するものを、若干の諸言葉を通じて概念に転換しようとして頭を傷めつけているとき、私は笑ってしまいます。美しいものは源初的な現象であり、それは、確かに、それ自体として現れることは決してないが、その反射は創造的精神の何千という色々な顕示の中に見ることができますし、それが非常に多様で変化に富んでいることは自然そのもののようなのです」(AA 24, p. 617)²⁶。不可謬性理

²⁶ [原書注番号 288] *M.u.R.* Nos. 719, 730, 745 (*HA* 12, pp. 467, 468, 470) も参照されたい。われわれはこれらに回帰しなければならない。

[訳註] [719] 《Das Schöne ist eine Manifestation geheimer Naturgesetze, die uns ohne dessen Erscheinung ewig wären verborgen geblieben.》; [730] 《Im Ästhetischen tut man nicht wohl zu sagen: die Idee des Schönen; dadurch vereinzelt man das Schöne, das doch einzeln nicht gedacht werden kann. Vom Schönen kam man einen Begriff haben, und dieser Begriff kann überliefert werden.》; [745] 《Die Manifestation der Idee als des Schönen ist ebenso flüchtig als die Manifestation des Erhabenen, des Geistreichen, des Lustigen, des Lächerlichen. Dies ist die Ursache, warum so schwer darüber zu reden ist.》; 「美は、もし美として発現しなければ永久にわたしたちの目には隠されたままになったであろうと思われる、秘密の自然法則の現われである。」; 「美学上のことで、美の理念という言葉を使うのはよろしくない。そうすることによって美を個々別々のものにしてしまうからだが、実ほ美は個々別々に考えることができないものなのだ。美について一つの概念をもつことはできる。そしてこの概念は伝承することができるものだ。」; 「美としての理念の表出は、崇高なもの、機知に富むもの、おもしろいもの、滑稽なもの、の表出とまったく同じように、

念に内在的な一つの特性である。他方では、幾つかの諸箴言において（後述のところで分析の対象になる）、芸術諸作品について反省する瞬間には、自然は理念と同一視されている。われわれが見るごとく、決定は予備的なものであることを止めることはできないだろう。

（ながお・しろう 経営学部教授）

つかま束の間のものである。これが、それについて語るのがなぜあれほど困難であるかという理由である。」（岩崎英二郎・関楠生訳「箴言と省察」、『ゲーテ全集 13』, pp. 308, 310, 312)；「美しいものは、その現われが無ければわれわれに永遠に隠されたままだっただろう、秘された自然法則の顕示である。」；「美学的なものにおいては、〈美しいものの理念〉を語るのは良い遣り方ではない——それによって、人は美しいものを孤立化させることになるのだが、しかしそれは孤立化しては考え得ないものなのだ。美しいものについて人は一つの概念を持つことができ、この概念は伝達されることができる。」；「〈美しいものとしての理念〉の顕示 [美の顕示としての理念の顕示；美しいものの、理念としての顕示；〈理念としての美しいもの〉の顕示] は、崇高なものの、既知に富むものの、陽気なものの、笑うべきものの顕示と同じく、一過的な儚いものだ。これが、それについて語ることがかくも困難であるかの原因である。」（拙訳）

「Ich muß über die Ästhetiker lachen, ... welche sich abquälen, dasjenige Unaussprechliche, wofür wir den Ausdruck *schön* gebrauchen, durch einige abstrakte Worte in einen Begriff zu bringen. Das Schöne ist ein Urphänomen, das zwar nie selber zur Erscheinung kommt, dessen Abglanz aber in tausend verschiedenen Äußerungen des schaffenden Geistes sichtbar wird, und so mannigfaltig und so verschiedenartig ist, als die Natur selber.» [Klassiker, II Abt. Bd.12(39), S. 598] 「私は、美学者どもがおかしくて仕様がないう。... 連中は、われわれが美しいという表現で呼んでいる曰く言い難いものを、いくつかの抽象的言語で一つの概念に統一しようと頭を悩ませているのだからね。美は、根源現象なのだ。だからなるほど、それ自体は現われることはないにしても、その反映は、無数のさまざまな創造的な精神のあらわれの中に見られるわけだよ。自然そのものと同じくらい多種多様なさ。」 [エッカーマン『ゲーテとの諸対話』, 山下肇訳, 岩波文庫, p. 130]；「私は美学者たちに笑わざるを得ない... 彼らは、われわれがそれについて美しいという表現を用いるまさにあの表現し難いものを、若干の抽象的な言葉によって一つの概念に変えようと頭を砕くのだから。美しいものは一つの原現象であって、それは自身では決して現象することはないものの、しかしその反映は、創造する精神の千もの色々な現われ方において見られるようになり、それは極めて多様で極めて多様なこと、自然そのもののようなのです。」（拙訳）